

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
冬号は、木曽川とともに発展した
木曽福島町から、
その歴史と現在進行中のプロジェクトを中心に、
歴史ドキュメントでは「輪中と農業」を特集します。

木曽福島町

ふるさとの街・探訪記

木曽の中心地として 発展した、木曽福島町

エリア・リポート

快適なまちづくりをめざし、
多彩なプロジェクトを実施

気まぐれにJOURNEY

歴史と文化が香る、 かつての宿場町

歴史ドキュメント

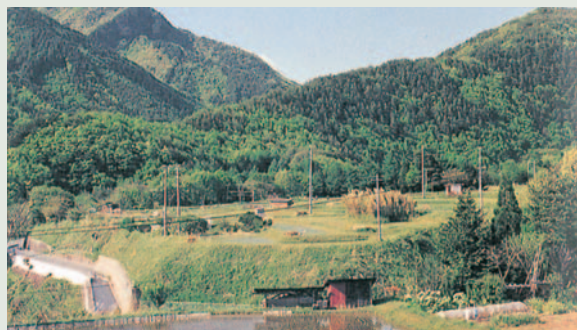
輪中と農業／農地の形態と耕作

TALK&TALK

『伊勢湾台風後、 急成長を遂げた長島輪中の農業』

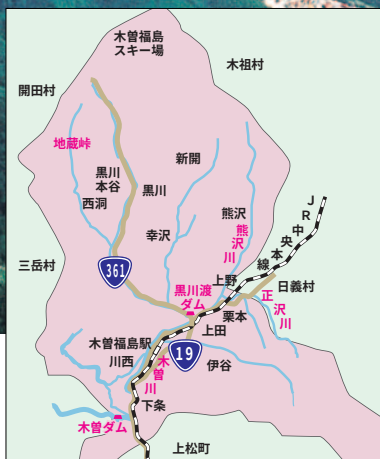
民話の小箱

覚明さまとどうがん岩

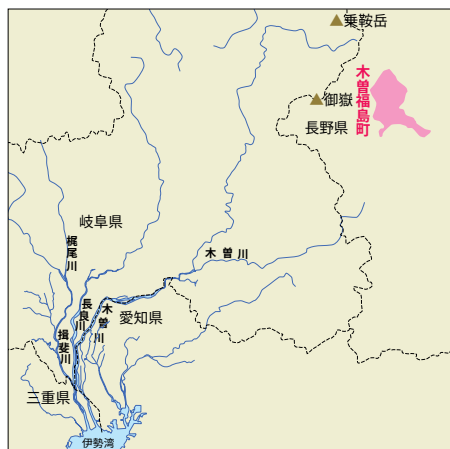


ふるさと探訪記

木曽福島町

木曽の中心地として発展した
木曽福島町

木曽福島町は古代から交通の要衝。奈良時代には吉蘇路が開通し、中世からは木曽氏が一带を支配。近世には木曽氏の遺臣であった山村氏が代官に任命され、この地を統治します。中山道が整備されると、四大関所のひとつ、福島関所が置かれながら城下町の様相でした。現在は観光開発や住民参加のまちづくりが着々と進められています。



曾路の起源であると考えられています。律令制下の木曽福島町は美濃国恵那郡に所属していたと推定されています。

木曽義仲の出現

朝日將軍の名で知られる木曽義仲は、木曽谷で平家討伐の旗揚げをしています。久寿元年（一一五四）、源義賢の二男として武蔵国で生まれた義仲の幼名は駒王丸。父が殺害された後、信濃の権守であつた中原兼遠に預けられ、兼遠のもとで木曽高原を走り回り、



木曽義仲元服松

木曽福島のあらまし

東に木曽駒ヶ岳、西に御嶽山。険しい山々の間を縫って流れる木曽川の谷間に細長く伸びた町、それが木曽福島町です。海拔は町の中心部で八〇〇mあり、地質の大部分が古生層で形成されています。交通の要衝、御嶽山・駒ヶ岳の登山口として栄え、長野県や公的機関の施設も多数設置されており、木曽郡の中心的存在となっています。

山林原野が九五%を占め、基幹産業は林業です。現在、自然環境や地域の特

古代の集落と吉蘇路の開通

を生かした企業の誘致も進められ、観光開発も積極的に行われています。

遺跡調査によると木曽駒高原から石器時代の出土品が発見されており、縄文時代の遺跡も高原に集まっています。農耕生活が始まった弥生時代の遺跡は上田遺跡から少量出土しているのみで、奈良時代の遺跡もほとんど確認されていません。遺跡の多くが高原地帯に集中し、木曽谷からは発見されていないというところは、木曽川と急傾斜地に阻まれた複雑な地形と食

糧の調達などが大変で、集落の形成が難しかったためでしょう。本格的に集落が形成されるのは平安後期のこと。灰釉陶器を出土する遺跡が一三箇所発見されています。

「続日本記」の和銅六年（七一三）に「美濃国信濃二国乃堺径道險隘往還艱難仍通吉蘇路」という記述が見られます。これは、美濃国から神坂峠を越え伊奈路を北上していた東山道とは別に、木曽谷を木曽川に沿って北上した新しい道、吉蘇路を開いたという記録です。この吉蘇路は、福島町の中心から、東へ深く入った木曽山脈の山麓を通過していたようで、木

やがて元服をして木曾義仲を名乗ります。

義仲は有能な武将として平家討伐では数々の戦勝を挙げ、征夷大將軍に任じられました。しかし、元暦元年（一一八四）、後白河法王の策略によって鎌倉軍に破れ、三二歳の短い生涯を閉じました。巴御前は、義仲とともに平家討伐にあたった実在の人物で、日本の歴史上数少ない女武者のひとりです。今から八三〇年ほど昔、上田（現在の木曾福島町新開上田地区）に館を構えていた中原兼遠の三女として誕生、権力者の姫にありながらも武芸に優れ、絶世の美女に育った巴御前は、義仲の側近の一人としてともに戦い、二人は愛を育みます。義仲がこの世を去る直前にその遺髪を御前に託し、御前は興禅寺に祀っています。

その後、木曾地方は大吉祥荘、小木曾荘、遠山荘の三つの荘園に統治されていきます。



興禅寺

木曾氏の支配

南北朝期の暦応元年（一三三八）、木曾義仲の子孫を名乗る木曾家村が、足利尊氏から木曾谷を安堵されました。これは大吉祖に当たる地域で、以後家村の子孫が代々木曾氏を名乗り、木曾一円を戦国時代まで支配することとなりました。家村の三男木曾家景は福島黒川の黒川に住み、黒川三郎常陸介と称しました。時代は下り、木曾親豊は福島に小丸山城を築き、子の信道を居城させました。小丸山城の築城により、それまで木曾南部の大桑村に居館を構えていた木曾氏が北の福島へ移り、福島が木曾の中心地となりました。

木曾氏は小丸山城の他にも、永正年間（一五〇四～二二）に上の段城を、天文年間（一五三七～五五）には甲斐の武田氏の侵攻に備え、大規模な福島城を築きました。こうして木曾氏一族は、信濃の四大勢力の一角にまで成長しますが、武田信玄との戦いに破れ、その勢力下に入ります。

天下を分けた関ヶ原の合戦では、木曾氏の遺臣であった山村氏が大きな功績を挙げ、その功により家康は山村氏を木曾代官に任命しています。木曾代官の山村氏は福島に居館を構え、多くの家臣団が居住、福島はさながら城下町の様相を呈して名実ともに木曾の中心地となりました。元和元年（一六二五）、木曾が尾張藩の支配下に置かれると、山村氏は幕府の旗本でありながら、尾張藩の代官として木曾谷を統治することとなりました。

中山道と福島関所

江戸幕府は五大街道の整備を進め、かつての木曾路は中山道として発展していきます。江戸と京のほぼ中間に位置する福島黒川の地には関所が設けられました。

福島関所は、木曾川の断崖と根ノ井山（関山）に阻まれた幅約四〇mの平地にあり、有事の際には最適な場所と考えられていました。関所では役人によって厳しい管理が行われ、特に出女・入鉄砲の検問が厳重に行われていました。



女札通行手形

広重版画 福島



木曾地方では中山道に木曾一宿が設けられました。福島関所のある福島宿は、ほぼ真中にあたり、飛騨や伊那からの道も福島に通じていました。いわば福島は交通の要衝。このため幕府にとっては、東国へ入る第一関門としても、西国へ出る最後の関門としても、厳しい取り調べをするには、お誂えの場所だったのです。福島宿には、本陣・脇本陣に加えて旅籠や茶店、店舗が立ち並び、木曾の政治・経済・文化の中心地として急速に発展していきます。

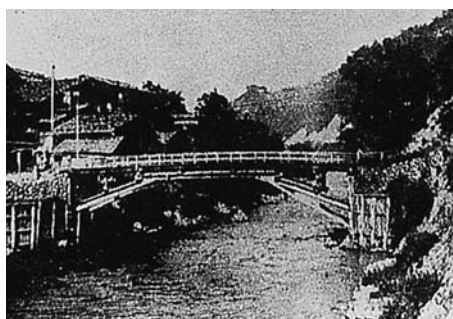
福島橋と水害

中央を木曾川が流れ、断崖が屹立する福島では、橋は重要な役割を果たしていました。山村代官は慶長一三年（一六〇八）の定書において、道路や橋梁が破損した場合、僅少の破損はただちにその村において修理し、大規模な修理が必要な場合は、申告の上修理すれば手当てを支給するという一ヶ条を設けています。

中山道に掛かる橋梁は、尾張藩の支配下であり、その修理費用は藩が負担していました。その他の橋梁は山村氏または村が負担するものでした。

木曾福島地域で木曾川を東西に連絡する橋は、筏橋・大手橋・行人橋の三橋でした。これらは相当古くからありましたが、筏橋は江戸時代に架けられました。筏橋は古図に上之はしと書かれており、昔は筏越しの渡し場であったものを、承応二年（一六五三）に橋をかけたことから、筏橋と呼ばれるようになった。

た、関所の真下にあったことから、関所橋とも呼ばれた。



筏橋とも呼ばれた関所橋

ていました。享保一一年（一七二五）には橋を架け替えており、元文三年（一七三三）の洪水で流失したとの記録が残されています。

行人橋（明治時代）



行人橋は福島と三尾・黒沢・大滝との交通上の重要な橋で、戦国時代にはすでに架橋されたとはいわれ

古橋と呼ばれていたようです。この橋は跳ね橋で、行人橋と名が改まったのは江戸時代の初期のようです。架け替えの記録で最も古いものは享保二〇年（一七三五）で、この時は周辺から延べ三五〇人の人足を集め、山村代官所の役人が普請奉行となつて工事を行つており、いかにこの橋が重要視されていたかがうかがわれます。しかしこの新橋も三年後の元文三年の洪水で流失しています。

大手橋はいわゆる代官屋敷の大手の橋を意味しています。近世の資料には御屋敷前橋と記載されており、御屋敷前大手之橋と呼ばれていたようです。この橋も寛永三年（一六二六）の架橋工事の約一〇〇年後の正徳五年（一七一五）の洪水で流失、享保一一年に架橋工事を行います。が元文三年の洪水にて流失、宝暦三年（一七五三）の大洪水でまた流失しています。

福島宿の水役

元禄年間（一六八八～一七〇四）の福島宿の書上げによると五四軒の水役というのがあります。この水役については明らかにされていませんが、一方では川狩という説があり、他方、消防ではないかという説もあります。水役は下諏訪にもあったとされ、川除け（治水工事）や用水普請、井戸掘りを担当したと記録されています。伝馬役に携わる人々はこの水役を、自分たちの集落が関係する場合に三分の一にまで労役を免除、関係ない場合は一切服さなかつたようです。伝馬役は当時の交通上の重要な機構で、いわば国家的な任務であつたため、水利工事労役の負担を免じたのでしょう。福島宿における水役は、今だ不明で今後の研究に期待しなければいけません。が、水利工事労役であつたとは充分に予測されます。

中央線開通と森林鉄道

明治時代に入ると、木曽地方にもさまざまな変革が起こります。木曽地方は伊那県の管轄となりますが、明治一一年（一八七八）には郡区町村が施行され、木曽は西筑摩郡に所属することとなり、郡役所が福島村に設置されています。昭和四二年には福島町と新開村が合併して、現在の木曽福島町が誕生しました。

明治四四年（一九一一）、東京の飯田橋と名古屋を結ぶ国鉄中央本線が全通し、福島には福島機関区が置かれました。国鉄が

木曽谷を通過したことにより、江戸後期から始まった御嶽山信仰の信者が国鉄を利用、その下車駅が福島駅であつたことから同駅の年間の乗降客数は国鉄中央本線の沿線駅の中でも有数でした。

鉄道網の整備により、帝室林野管理局木曽支庁は、木曽川を利用して行ってきた木材搬出方法を、中央線を利用する貨車輸送に切り替えることになりました。

そこで、木曽川本流を利用する木材流送を鉄道による陸送に切り替え、続いて支流を利用する木材流送に替えて森林鉄道を中央線に連結し、逐次流送を陸送へ転換していくといった近代化を図つたのです。

森林鉄道は全国に先駆けて建設されたもので、その起点は長野県の上松駅となりました。それまで木曽の中心地といえは福島町。起点からは離れた福島町は反対運動を起しますが、地勢上からみれば上松から上流にある福島を起点とするのは無理な問題でした。こうして森林鉄道が上松駅から三岳村・王滝村へ通じるようになると、従来の福島と両村との物質的な流通状況に変化をきたし、それまでの商圏が上松町に奪われる形勢となりました。そこで町は森林鉄道の支線を手滝村から福島町へも敷設してほしいと陳情しますが、不発に終わっています。時の内閣総理大臣桂太郎に陳情を行つた様子を記録した「明暗二路」によれば、桂太郎は「諸君には大いに同情するが、元来森林鉄道は材木を運ぶのに単一勾配で下らなければならぬので、王滝川の

合流点から約一里の間を逆勾配で遡上することは維持経営の点で問題にならない。私が口入れをして郡道御嶽街道の建設に補助金を出させるから、それで我慢しなさい。」

こうして森林鉄道は見送りとなくなりますが、時代の進展に伴い森林鉄道は衰退し自動車の時代へ。現在は国道一九号が木曽川の東岸を並走、国道三六一号が北西部を走り、JR中央本線の特急「しなの」を利用すれば、木曽福島と名古屋間はわずか八〇分というアクセスの良さです。

現在は「自然と歴史に新しい息吹」をテーマに、木曽福島中心市街地商業等

御嶽登山者でにぎわう木曽福島駅ホーム



活性化基本プロジェクトを着々と実施、また、市町村合併構想により、官民が連携し住民参加の新しいまちづくりを目指しています。

参考文献

- 『木曽福島町史』
- 『第一巻歴史編 第二巻現代編Ⅰ』
- 『木曽福島町史』 第三巻現代編Ⅱ
- 昭和五八年 木曽福島町教育委員会
- 『木曽福島町勢要覧』
- 平成一四年 木曽福島町
- 『福島関所』
- 平成一三年 木曽福島町教育委員会
- 『日本歴史地名大系二巻長野県の地名』
- 平成元年 平凡社
- 『角川地名大辞典 長野県』 角川書店

快適なまちづくりをめざし、多彩なプロジェクトを実施

国有林野内直轄治山事業復旧治山事業

空梅雨一転集中豪雨に

平成一一年六月二九日午後から三〇日朝にかけて、長野県では中南部を中心に二〇〇㎜を超える強い雨に襲われました。

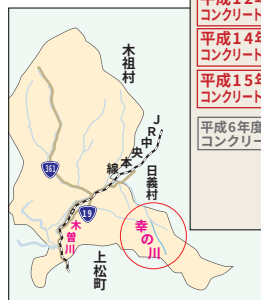
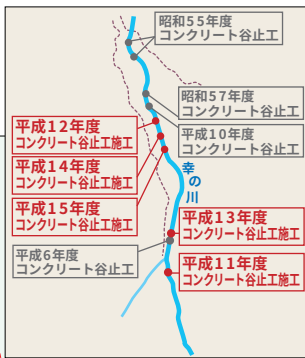
長野県地方気象台によると、県内各地の降り始めからの降水量(二〇日午後四時現在)は、王滝村・御嶽山の二五五mを最高に、飯島町で二二八㎜、浪月村で二四㎜など、平年値の二一八～二二〇の四倍に達した。この年六月三日の梅雨入り後、極端に雨量の少ない日が続きましたが、後半は活発化した梅雨前線の影響で、中南部を中心に集中的な豪雨となつたため、平年を大きく上回る降水量となりました。特に二七日、二九日、三〇日は、木曽地方など各地に土砂被害などをもたらす豪雨となりました。

道路・山林・被害五〇億円

長野県がまとめた被害状況によると、伊那市で住宅一棟が半壊したのをはじめ、全県で五棟が一部損壊。床下浸水は三九五棟にのぼりました。

住宅以外の被害では、道路や橋、河川など土木関係の被害が二億四千五百万円。林道や山林など林業関係が二億五千七百円となり、合計で五〇億円に達しました。

市町村によると、諏訪市、第一グラウンド裏の斜面が幅八m、長さ一五mにわたって崩落。文化財関係では南木曽町の国史跡「中山道」や飯田市の県史跡「御嶽堂古墳」、箕輪市の県史跡「福与城跡」

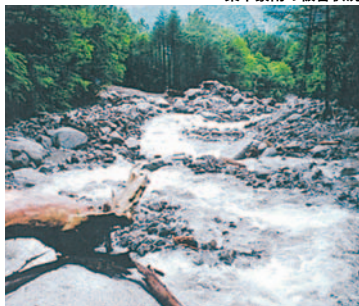


で倒木や斜面の土砂が崩れる被害が発生しました。

幸の川

木曽福島町内の木曽川水系幸の川でも、この豪雨が誘因となり多量の土砂が流下したため、既設のコンクリート谷止工(砂防堰堤の一種)が異常堆砂し、水が袖部を廻つて危険な状態となった。ほかに、林道も大きく被災しました。

集中豪雨の被害状況



渓流内には、六千㎡の不安定土砂、倒木が残留して、今後の中小降雨により再度流失する危険がありました。そのため、下流域の水道施設・保護施設等の保護・保安上からも早急な復旧対策が必要でした。

その対策として、中部森林管理局木曽

豊かな自然に恵まれた木曽福島は、文化や伝統を育む一方、河川災害や土砂崩落などの災害も。平成一一年には集中豪雨が頻発し、豪雨による土砂流出の危険が増しました。このため、復旧事業に着手。また、自然や歴史、文化を継承し、さらなる発展をめざすまちづくりプロジェクト、環境保全をめざした町民主体のボランティア活動などが着々と進められています。

森林管理署では、平成一一年度から復旧治山事業を計画し着手して、平成十五年度までに谷止工を五基施工し不安定土砂の抑制を図りました。

谷止工 概要

治山設備、治山ダム

渓床の安定及び崩壊地の山脚を固定して、山腹工事の基礎とし、あるいは崩壊地の自然復旧を促進し、渓床の縦断浸食及び横断浸食による崩壊の危険性のある山脚および渓床を固定して山腹崩壊の防止と不安定土砂の移動防止、あるいは土石流による渓床、渓岸の荒廃を防止して、下流への流出土砂を抑制及び調整する事を目的とする。

(治山技術基準 解説 総則・山地治山編 ― (社)日本治山水協会)

谷止工設置の基準

基礎の根入れ

- (1) 盤状硬岩で風化していない場合……………0.50m程度
- (2) 岩の場合……………1.00m程度
- (3) 軟岩(風化しやすい)岩盤又は亀裂の多い岩盤……………1.50m程度
- (4) 砂礫層の場合……………2.0～3.0m程度

(計画内容と施工実績)

平成11年度 コンクリート谷止工	L=46.0m H=8.5m V=1,062.0m ³
平成12年度 コンクリート谷止工	L=46.0m H=6.0m V=637.0m ³
平成13年度 コンクリート谷止工	L=22.0m H=6.0m V=310.0m ³
平成14年度 コンクリート谷止工	L=32.0m H=6.5m V=481.0m ³
平成15年度 コンクリート谷止工	L=41.0m H=6.5m V=605m ³

参考文献

- 『木曽福島町史』
- 『読売新聞』 平成一一年七月一日
- 『信濃毎日新聞』 平成一一年七月一日
- 『治山技術基準 解説 総則・山地治山編』
- 発行社 日本治山水協会

自然と歴史に新しい息吹を

― 歩いて感じるまち・木曽福島 ―

「木曽福島町中心市街地商業活性化基本構想」

計画策定と目的

木曽福島町は、木々の緑、木曽川の清流など恵まれた自然環境の中にある山紫水明の美を誇る渓谷の町です。江戸時代には交通の要衝として中心的な役割を担い発展してきました。しかし近年、

活性化法に基づく「中心市街地商業等活性化基本構想」と位置付け、総合的かつ計画的に展開するための指針となるものです。

計画期間

短期：平成一四年度～一六年度
中期：平成一七年度～二〇年度
長期：平成二一年度以降

中心市街地活性化に向けた事業

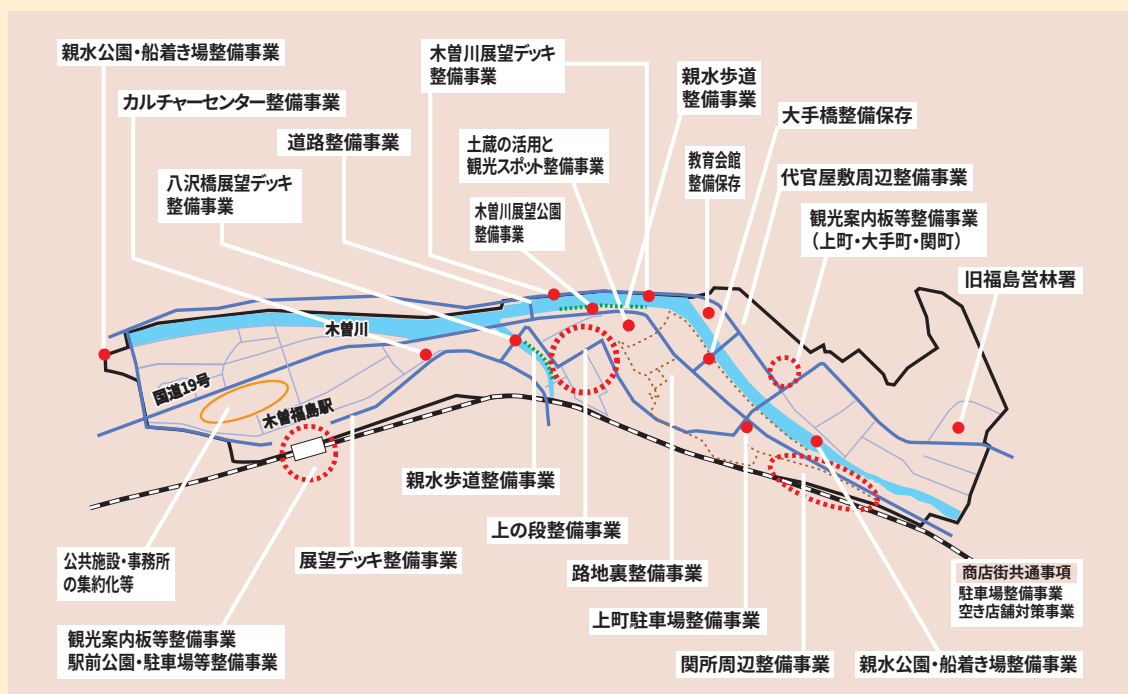
● 商業活性化のための事業

- 一、住みやすい環境が整ったまちづくり
- 二、サービスが充実し、便利に買物ができる商業づくり
- 三、町民、観光客が楽しく散策し、食事や買物のできるまちづくり
- 四、協働による町民活動が活発まちづくり

本計画は「木曽福島町第四次総合計画」の基本構想に即しつつ、中心市街地画の基本構想に即しつつ、中心市街地

計画の位置付け

木曽福島町の誇る自然・歴史・文化を維持・継承し、緑や水といった自然や先人が築き上げてきた歴史風土をテーマに、現代的な新しい感覚を取り入れながら人々が集り楽しく交流し楽しく買物ができるなどにぎわいのある幸せ空間のまちづくりを推進。町民・事業者・行政などが力をあわせ、プロジェクトを進めています。



街並イメージ



上の段イメージ



親水歩道・展望公園イメージ

●市街地の整備改善のための事業 「一二三」は右記と同じ。

四、安全・快適に暮らせるまちづくり

この事業では、親水公園や河川景観の整備、ポケットパークや街路樹、コミュニティ道路の整備などが計画されています。

●主要整備事業計画図

こうした事業の中でも現在着々と進

美しい河川を未来へ。町民あげてのボランティア活動

川遊び若衆が筏下りを復活

川遊び若衆は、木曽福島町のまちづくりの有志です。平成七年六月に結成されました。

きっかけは「昔のようにもう一度きれいな木曽川で思いっきり遊びたい」「一回でいいから、生きている間に木曽川を筏で下つてみたい」とでした。

今から五〇〜六〇年前までは、木曽川ではあちこちで子どもたちの歌声が聞こえ、水しぶきがあがる楽しい遊び場でした。しかし、水質汚染や危険などの理由で子どもたちを木曽川から遠ざけてしましました。

賛同した有志は一五名。トントン拍子に話が進み、平成七年七月に開催した「木曽踊り全国大会」というイベントにあわせ、「木曽の中乗りさん木曽川」と銘打ったアトラクションとして、筏による川

められているのが、「上の段歴史街並み再現事業」と「本町親水公園整備事業」です。

上の段地区は、上の段城の一郭としてできたところ。中世、木曽氏の館がありました。古くからの水場があり、小路の奥には大通寺があります。近世には中山道が通り、袖卯建の堅繁格子のある町家、石置屋根の家、なまこ壁の土蔵

下りを披露しました。

木曽踊に歌われる「中乗りさん」の由来は、どうやら三説。一つ目は、馬に三寶荒神の鞍を置きその中央に乗った人を「中乗り」とした。二つ目は、木曽川を下る筏に乗る人を「中乗り」としたもの。三つ目は、御嶽信仰にまつわる神のお告げを信者に伝える役を担った中座といわれた人。その中で有力とされているのが「筏乗り」説です。

明治四四年（一九一）、中央本線が開通するまで行われてきた「筏乗り」。それは材木を流送する方法で、実に三〇〇年もの歴史があります。その筏の上を前後左右に飛びながら筏を操る人が「中乗りさん」だったようです。

平成七年のアトラクションでは、見事八〇年ぶりに筏乗りを復活させたわけですが、それはまさにイバラの道でした。ですが河川管理者、電力会社、漁業組合

などが並んでおり、今も宿場時代の面影を残しています。

こうした歴史的空間を活かすために、石置による道路整備や水場をイメージさせる水車を設置、大通寺への小道を活用するなどがすでに実現しています。

本町親水公園整備事業では、大手橋から行人橋付近の木曽川沿岸を整備

の協力を得て、また、木材の調達から手探りで筏づくり、木也り唄の練習を繰り返し、沈没・転覆などを経験しながらも、ついに実現したのです。

当初、一五名ではじまった「川遊び若衆」も今や会員数三二名。未来を担う子どもたちへ、水の大切さを訴える課外授業や筏乗り体験を通して、水環境保全の啓発に努めています。

こうした活動が認められ、平成八年二



夏休みこども筏体験

すでに石積みへの工事は終わり、後は公園と足湯を着工するのみとなっています。

■参考文献

『木曽福島町TMO構想
中小小売商業高度化事業構想二〇〇三』
平成一五年五月
株式会社まちづくり木曽福島発行

月には木曽福島町が国土庁（現国土交通省）の「水の郷百選」に認定されました。平成九年には、水環境文化の普及に務めたとして、環境庁（現環境省）の「水環境賞」を受賞しています。

現在も子どもたちの夏休みにあわせて筏下りや河川清掃を行っています。

清掃活動に励む河川愛護団体

木曽川とともに歴史を歩む木曽福島町では、町民あげて川の保全に取り組んでいます。

「中畑区河川愛護会」の構成員は約三〇〇名、河川の草刈、清掃、空缶等のゴミ拾い及び芝桜の手入れを行い、平成一〇年には木曽建設事務所の所長表彰を受賞。平成一三年には長野県知事表彰を受賞しています。この他にも「中島区河川愛護会」（構成員三三三名）、「木曽川香魚会」（構成員三〇名）、「十一日会」（構成員一六名）などが、河川保全活動を行っています。

気ままに
JOURNEY

木曽福島町

歴史と文化が香る、 かつての宿場町

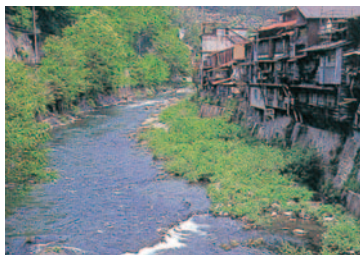


大通寺鐘樓門

冬の柔らかな陽射しを浴びて木曽川は輝き、雪を抱いた山々はやさしく微笑む。美しい自然に育まれた木曽福島は、歴史と文化が香る町。中山道にたまたずれば、旅人のざわめきが、福島関所を通る女たちの心臓の高鳴りが、風に乘って聞こえてくるようだ。

五平もちとそばに舌鼓

JR名古屋駅から特急「しなの」でわずか八〇分。木曽福島駅の前には「五平もち」や「信州そば」と看板掲げた商店街が温かい湯気を上げて迎えてくれました。木曽川を



崖家づくりの家並み

背に立ち並ぶ家々の特徴は「崖家づくり」です。深谷をなす木曽川の断崖を巧みに利用し、床を川上に張り出すような家づくりをしているのです。これも狭い土地を有効に活用した先人の知恵なのでしょう。

五平もちをほろぼりながら町の中央に向かってそぞろ歩けば、江戸時代創業というおそば屋さんの看板が見えてきました。旅の醍醐味はクルマ。土地のものを食べずして、土地を理解することはできないとばかりに店に入れば、美味しそう



木曽のそば

五平もち

人々が行き交う橋

中山道から飛騨街道へ。そして福島関所へ。街道を行く旅人がそして福島の人々が行き交っていたのが、木曽川の兩岸東西を結ぶ橋でした。

行人橋はその名の通り、行人たちが渡った橋です。御嶽信仰に励む行人たちはこの橋を渡って水行潔斎を行い、行を終えた後、また行人橋を渡って御嶽登拝の人々に加わったといわれています。そのため、この辺りは明治初年まで殺生禁断の

場所とされていたようです。橋のふもとにあった「御嶽街道」の道標は、現在木曽福島郷土館に移されています。

行人橋



大手橋

から北に見える橋が大手橋です。中山道から代官屋敷へ渡る橋で、昭和二十一年、工学博士中島武による設計により、世界最初の鉄筋コンクリートローゼ橋として生まれ変わりました。町では以前から文化財として大切に保存し、平成一四年には土木学界選奨土木遺産として認定されています。

中山道の風情をそのままに

行人橋にほど近い上の段地区は、中山道の町並みをそのまま残す情緒豊かな

ところ。ここを流れる上の段用水は中世にひらかれたもの。木曽家の殿様の館に八沢川上流から取水したのが、始まりです。以来、人々が朝夕の水汲みに集り、ふれあい水場として昭和初期まで使われていました。道端の水車はそんな風情を今に伝えているのです。観光文化会館もまた、福島の人々の暮らしを伝える資料館です。「ようこそ、いらしゃいました。熱いお茶でも」と声をかけてくれたのはボランティアでスタッフをつとめる地区の奥さまたち。町の人々のふるさとへの想いが、こうした活動を支えているのです。神輿の模型や消防の装束など、町の暮らしを物語る数々はもちろんのこと、木曽福島の清酒や百草丸、珍味などなど、特産品の販売も。なかでもフキノトウを練りこんだ「ふき味噌」やゴボウや唐辛子を練りこんだ「とうがら味噌」は、炊きたてのご飯にも日本酒にもイケル。お土産には最適の逸品です。



観光文化会館のボランティアスタッフ

高札場と大通寺

上の段の中山道沿いには往時をしのばせる高札場があります。高札とは江戸時代のお触れや御条目を制札として掲げたもの。高札場は柵を張り誰もし寄りかかれないようにして、中には栗石が敷き詰められていました。高札場は宿場間の里程(距離)を測る基準として用いられていましたから、容易に移設できない場所でした。上の段の高札場は天保年間(一八三〇〜四四)に八枚の札を掲げている様子を再現したものです。「福島より上松への駄賃銭」

「駄賃荷物の定め」「クリシタン禁制」などなど、江戸時代を知る興味深いものばかり。識字率の低い江戸時代には古老たちが読み聞かせていたのでしょう。



高札場

か。高札は現代の法律のようなものでしたから、墨が薄れ読みにくくならなくても、領主の許可がない限り、修正することはできませんでした。

この上の段には木曾福島町最古の木造建築物もあり、関ヶ原の合戦後、山村良勝が建立した大通寺の鐘楼門が、それです。山門に掲げられた扁額も江戸中期を代表する書家、三

井親和の作です。偉容ともいえる堂々とした風格は、この町の豊かさを物語っているようです。

井親和の作です。偉容ともいえる堂々とした風格は、この町の豊かさを物語っているようです。



高札

歴史遺産を歩く

中山道の宿場町として、山村代官の城下町として歴史を重ねる木曾福島は、他にも見どころは盛りだくさん。福島関所資料館には、当時の拷問の残酷さを物語る道具や武器が並べられ、見ているだけで身がすくむような迫力です。木曾氏、山村氏代々の菩提寺である興禅寺は、木曾三大名

利のひとつ。本堂の前に広がる雲海、美をテーマにした枯山水の庭園「看雲庭」は、現代作家



興禅寺・看雲庭

木曾漆器



失いましたが、幸い昭和二年の大火で焼

重森三玲の手によるもので、枯山水の庭としては東洋一の広さを誇ります。島崎藤村の姉が嫁いだ高瀬家は、小説「家」のモデルとなった旧家。失いましたが、幸い昭和二年の大火で焼

木・曾・福・島・の・歳・時・記

◆水無神社祭礼 みこしまくり◆

日時：7月22、23日

「みこしまくり」は、全国的にも珍しいお祭りとして有名です。ルーツは戦国時代。飛騨の水無神社が戦乱に巻き込まれそうになったため、この地へ木こりの仕事で来ていた宗助と幸助が、故郷の木曾福島町へ神社を移そうと計画。神輿をかついで峠を越えようとしたとき、追っ手と奪い合いが始まりますが、幸助と宗助は神輿を峠の坂道を転がしながら逃れ、ついに木曾福島に奉ることができました。この話を由来として、毎年白木でできた約400kgもの重さがある御輿を「宗助」「幸助」のかけ声とともに町内をかつぎ歩き、夜には地面に放り落とし、横まくり縦まくりと転がし回して、最後にはメチャクチャに壊してしまうという荒っぽいお祭です。



木曾福島町 EVENT INFORMATION

2月	きそふくしまスターズスキー大会
3月	きそふくしま'ずGSカップ(上旬) 新和GSカップ(中旬)
5月	木曾福島県流釣り大会
7月	木曾駒ヶ岳登山安全祈願祭(上旬) 白山神社祭礼(15日) 水無神社祭礼みこしまくり(22〜23日)
8月	木曾踊り(1日〜16日) 木曾義仲たいまつ祭(13日) 義仲・巴ら勇士を讃える会全国大会(13日) 木曾音楽祭(21〜24日)
10月	福島関所まつり(12日) 白山神社祭礼(13日)
12月	木曾駒湖威厳新和スキー場開き(中旬) きそふくしまスキー場開き(中旬)



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC 中央自動車道(約1時間30分) 中津川IC 国道19号(約60分) 木曾福島町

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 JR中央本線(約1時間20分) 木曾福島町

●お問い合わせ●

◆木曾福島町役場◆

〒397-8585 長野県木曾郡木曾福島町5129 TEL 0264-22-2001(代)
http://www.town.kisofukushima.nagano.jp

特集 輪中と農業

第二編

農地の形態と耕作

堀田の造成

木曽三川の中・下流域に数多く分布する輪中とは、水防を媒介として結ばれた治水共同体です。輪中低湿地帯と呼ばれる地域では連年のように洪水が発生、また、周囲の堤防が集落や耕地よりも高かったために、雨水などによる内水被害も多く、これらの水害を防ぐためには、集落の団結力が必要でした。輪中という治水共同体は、こうした共通目的の下で結束し、成り立っていたのです。

輪中が濃尾平野西部に成立したのは、江戸時代初期のこと。以降、新田開発に伴って数多く形成されるようになります。この輪中低湿地域にみられる土地利用形態の特色を示すものとして堀田があります。それは自然排水できない悪水が湛水するため、作物の水腐れに悩まされ続けた輪中の生産性を高める方法として考え出されたものです。一部の田面の土をきりとって堀（堀潰れ）とし、その土を隣接する田

面に盛土して高くします。このため、短冊形・櫛歯状の堀（堀潰れ、伊勢地方では切上堀という）と田（堀上田、岐阜県曾我屋地方では「もやい田」という）が一面に展開して「堀田」を形成しました。江戸時代後半から明治初頭にかけて普及拡大しました。

下流部の高須輪中の堀田造成は、帆引新田（海津町）の村明細帳に記された明和元年（一七六四）の堀田造成が最も古く、本阿弥新田（海津町）の安永五年（一七七〇）が続き、天明の飢饉以後の天明六・七年（一七八六・七）に同村が堀田造成に踏み切ったことが明らかになっています。

高須輪中での進捗は、輪端部から輪央部方向へ進み、江戸末期には輪央部にまで達していたことになります。以上のことから、輪端部側の悪水排除が困難になるにたがって、その面積を拡大したことが明らかです。

なお、本阿弥新田では、天明四年（一七八四）には三二町歩に、文化五年（一八〇八）には七一町歩に増加

造成当初は凶作が続き、他村への出作りや出稼ぎがみられますが、江戸末期には反収一石程度でした。

堀田の形態と機能

堀田をその形態と機能から分類すると、河間吹型、孤立型、田舟型とに大別することができます。

【河間吹型】このタイプは、西濃平野の北部に多く分布しています。この地方、すなわち上流部輪中地域は、扇状地が三角州に移っていく境で、「がま」と呼ばれる自噴水が多く湧き出したところ。大垣輪中西部を流れて揖斐川に注ぐ杭瀬川、本巣郡穂積町と安八郡墨俣町の境を流れ、長良川に合流する犀川などは、これらの「がま」の水を集めて流れる小河川です。

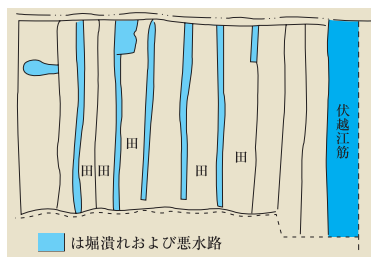


図1) 河間吹型の堀田

江戸後期から明治初期にかけて、堀田の造成が急速に拡大普及しました。

堀田とは、クリークと呼ばれる堀を配した耕地のことです。輪中の成立により、悪水が湛水する低湿地帯で盛んに造成されました。しかし明治以降の近代化で堀田は消滅する。以後の土地改良や動力の排水機の導入で、農業は機械化し大きく変貌することとなりました。

大垣市北部には「河間町」とか「領家河間町」といった「がま」を町名にしているところもあり、水質汚染が激しい現在でも「はりよ」という稀少な魚の棲息が確認されています。

この地方に分布しているのが「河間吹型」です。一般的には図(1)のような規則性をもった短冊形のものが多く、これらの堀潰れは、細い溝渠と接続し、悪水川と結ばれていました。

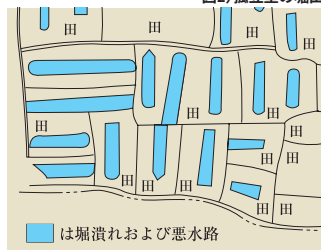
機能的には、河間吹型堀田は「がま」の水の低地停滞を除去することともに、稲の生育に有害な低温水を田面外へ放出する水路の役割を果たしていました。

「河間吹型」の堀田は、特に、河渡輪中において顕著で、岐阜県合渡の寺田・河渡、本巣郡北方町高屋・生津などはその典型的なものでした。

【孤立型】西濃平野中央部の著しく低湿ではない地域には、「孤立型」の堀田が多く分布しています。

その多くは、一筆の耕地の中央に短冊状の堀を設置、これらの堀は排水路

図2) 孤立型の堀田



(溝渠) と連結しているものはほとんどありません。このタイプの堀は、下流部輪中の堀に比べて狭く、浅いのが特徴です。梅雨時には天水で満水し、田面に溢流・停滞しますが、普通時には半分程度の水位でした。したがって、渇水期には足踏み水車で田面に水を引き入れて、灌漑用水として利用することもしばしばでした。また、冬の休耕期には、その水位が低いため、水田土壌の乾燥による土壌改良に有効な働きをしました。「孤立型」の堀田は、中流部輪中に見られましたが、下流部輪中においても、輪頂部などに分布していました。

いました。この堀は、村所有の溝渠(悪水路)と結んで、支線と本線の役割を果たしました。これらの堀や水路は、水上交通(肥料・農具・農作物・米などの運搬)に欠かせない交通上の動脈でした。

また、堀潰れなどは淡水魚・淡水貝の好漁場で、人々の重要な蛋白質源となっていました。一方、堀底泥土を「どべすき」と呼び、これを田植前の田一面に盛り上げ、有機質肥料として利用しました。泥土の入った田の稲は、秋落ちが少なく、収穫も多かったようです。その他、堀上田の崩壊保全と一筆耕地における用排水導入の堤防的な役割を果たす畦にも泥土を利用、これを「めんどろひき」と呼んでいました。

さらに、民家に近いところを流れる堀の水は、野菜洗いや洗濯にも使われました。「田舟型」の堀田は中流部輪中から下流部輪中、それぞれ輪端部に顕著にみられました。

さらに、民家に近いところを流れる堀の水は、野菜洗いや洗濯にも使われました。「田舟型」の堀田は中流部輪中から下流部輪中、それぞれ輪端部に顕著にみられました。

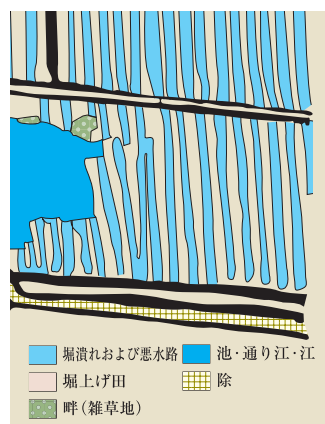
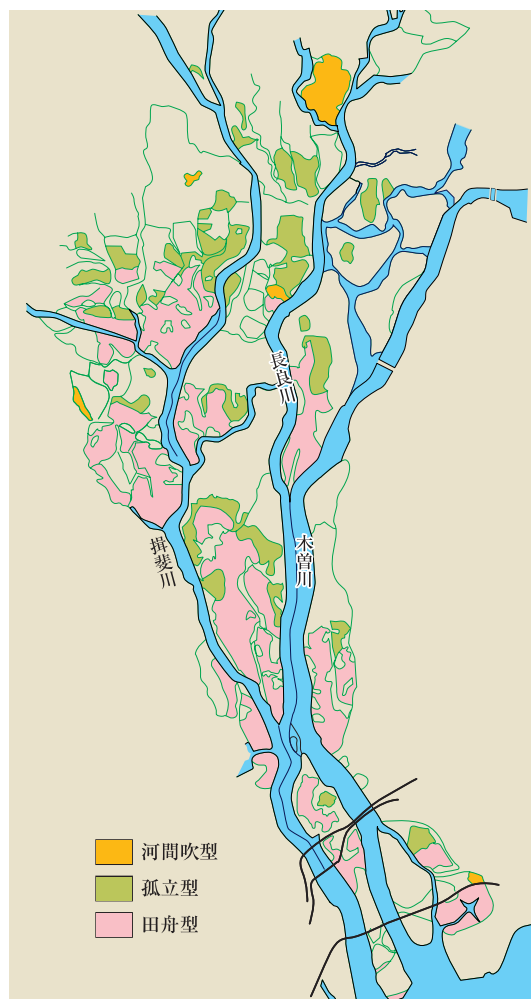


図3) 田舟型の堀田



西濃平野における堀田の分布(1887年)横井良克原図

経済構造」より

耕地の境界

濃尾平野における水田の特徴のひとつに、一筆の耕地(畦で区画された水田)が非常に大きいことがあげられます。これは、土地の高低差が少なく、水利の関係から一筆の耕地が大きくなり、一筆の耕地を何人かの地主が所有しているのです。この場合、耕地の境界が問題となります。また、畦に全く接しない水田もあります。畦に接しない田のことを、「めくらじ」とか「おく」と呼んでいます。

畦に接していない田の場合、他の所有者の土地を通ることになります。年貢(井領米)などを納めることはありませんでした。その代わり、周辺が田植えを行う前に田植えをし、周辺の稲刈りを行う慣習がありました。これ

堀田の三類型の分布を大観すれば、輪中地域の高位部から低位部に向かって、河間吹型→孤立型→田舟型の順に分布しています。

しかし、同一輪中は同じタイプの堀田とは限りません。例えば、高位部の輪中では河間吹型のそれがあるのに、輪端部には孤立型ないし田舟型がある場合もあります。さらに低位部輪中では田舟型が多いとはいえ、輪頂部の一部には孤立型もありました。

輪中特有の風物詩であった堀田は、明治以降の相次ぐ土地改良や排水機の導入により、次第に姿を消していききました。堀田の消滅は、水田面積を急増させ、田舟交通を道路交通に転換させるとともに、機械化農業促進に大きく貢献しています。

(以上、古今書院発行「輪中―その展開と構造」第6章「輪中地域の

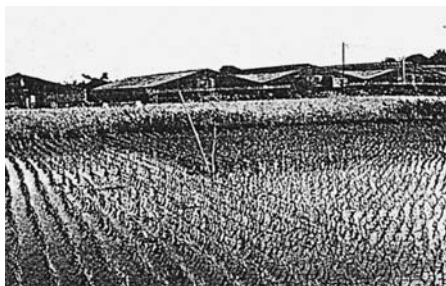
らの慣習が行われていたのは、八開村の元赤目・小判山などの集落でした。

「めくらくじ」

においては他の境界の目印として「さいめくじ」という杭を利用しました。これには、杉・松・柳・栗などが仕様されました。田の畦は、「かみもち」と言われ、上の田の所有者が管理し、同時に畦の草も刈り取り肥料として利用することができました。

一方、耕地と農道との境が長い年月の間に不明確になることもあり、道路幅や耕地との境を明確にするために、芯杭調べが行われることがありました。芯杭とは、一般的には道路の中央に打ち付けてある杭のことで、道路の両端には袖杭が打ち込まれていました。この杭は、杉・栗・松・竹などでできていました。

竹の場合には、その竹筒の中に灰が入れてありました。こうしておくことで、芯杭の竹が長い歳月の間に腐敗しても、灰によってその位置が確認できたからです。これが行われていたのは、八開村の川北・立石・給父・元赤目・



さいめくじ(小判山)

上東川の集落でした。

明治時代以降、芯杭が打ち込まれている位置を記した「芯杭帳」を区長が保管し、「芯杭帳」をもとに、道路の付替えをするところもありました。

地割制度

八開村に残された古文書の中に「新田本町場割替帳」「新田新町場割帳」「新田番付覚帳」などがあります。これは江戸時代末期から明治にかけて行われた土地割替に関する記録です。天保一一年（一八四〇）、弘化二年（一八四五）、弘化三年（一八四六）、嘉永四年（一八五二）、嘉永六年（一八五三）、安政三年（一八五〇）、万延二年（一八六二）、明治四年（一八七二）に実施されたものがみられます。

土地の割替制度は、「地割制」「割地制」「くち地制」などとも呼ばれ、一定年数ごとに所有地を割り替える制度のことです（以降、本文では地割と呼ぶ）。

古文書によれば、佐織の北河田村の項には「地割八十ヶ年ホトツツニスル也」、小津村の項には「十ヶ年毎ニスル也」とあります。尾張地方では一〇年ごとに、また日本海側の諸地域においては二〇年ごとに行っていたようです。

地割の慣行は、湛水などの水害を少数の農民だけが受けないように、集落全体で安全を確保するように行われた

ものであったようです。

尾張藩の資料によれば、この地割について藩は不介入とし、あくまで村民たちが自発的に行う慣行としていました。

尾張藩地方では概ね一〇年に一度地割を行っていたようですが、八開村では前述の記録のように、天保一一年から明治四年までの約三〇年の間に、割替が八回実施されており、四～五年毎に行われていたこととなります。

資料には割替に際して、割替後の新しい耕作者の名前・面積・長さ・横幅の寸法が詳細に記されています。また、「割り出し」といって、割替後に面積が従前と同じようになるように特定の土地を細分化して畝ならしを行ったり、さらに、田畑の地味が悪く生産力の低い土地については、「泥引き」といって余分に耕地が割り付けられていたようです。

このように多くの人手と煩雑な事務手続きを要する地割が、八開村で四～五年毎に行われていたのは、低湿地帯という地域性に起因していました。つまり、八開村を流れる領内川は連年のように水害を引き起こし、田畑を流失させ、潰れ地などを出現させていたため、割替によって問題を解決していたのです。

近世の石高制に基づく年貢の負担は、村請制という形態をとっており、農民が耕作する田畑は今日的な意味で

の私的土壌所有ではなく、ムラを単位とした共同体的な土壌所有関係にありました。耕地は農民個々の所有であるとともに、ムラの所有でもあったのです。こうした共同体意識は、輪中の成立要因でもあると治水共同体と質を同じくするものでした。共通認識があるからこそ、地割は円滑に行われたのでしょう。地割慣行には、水害などにより農民が没落するのを防ぐ運命共同体としての村落結合の強さが存在していました。

しかし、明治時代に入ると地割制度は廃絶されます。明治政府は、近代的な土地所有制度を確立するにあたり、地券を発行し、地券の所有者を土地所有者としました。そして、地租（税金）を徴収する近代的な税制を確立しました。この近代的な土地所有制度を確立するに際して、地割の慣行は大きな弊害となり、明治六年（一八七三）の地租改正を契機として廃絶されました。

（以上、八開村史 民俗編より）

参考文献

- 『木曾三川流域誌』建設省（現国土交通省）平成四年
- 『輪中と治水』岐阜県博物館友の会 平成二年
- 『輪中と治水』岐阜県小学校社会科研究会 昭和五十七年
- 『輪中』大垣市輪中館 平成四年
- 『輪中―その展開と構造―』古今書院
- 『八開村史』民俗編 八開村 平成六年



『伊勢湾台風後 急成長を遂げた 長島輪中の農業』

長島町 輪中の郷主 諸戸 靖氏



諸戸 靖氏

生年月日 昭和31年2月13日
最終学歴 関西大学 文学部史学科
職歴 昭和54年から桑員地区にて小学校に勤務
平成2年から長島町職員(輪中の郷に勤務)
現在、輪中の郷主
著書 木曾川(共著)
昭和中期の木曾三川下流域の状況と
東南海地震による影響(99年土木史学会)

伊勢湾台風と長島町の治水工事

明治改修後、それまで多発していた洪水が激減し、破堤がもたらす災害から免れることにより、安定した生活が保たれるようになりました。それは農業生産における恒常的な収穫をもたらしたものの、濃尾平野西部の自然沈降現象によって輪中内は徐々に沈下していきま

した。江戸時代後期から輪中内での堀田での耕作が普及し始めます。これは、沈降現象による地盤沈下によって、輪中内の耕作地は周囲の河川の水位より低いところに位置するようになるため、排水がますます困難になって、長期湛水化現象が顕著になったからです。このため耕作面積の減少をもたらす堀潰れを作つてまで、排水を維持しようと努めました。堀田は輪中の象徴のように言われますが、収穫量の減少をもたらす堀田は、農民にとって好ましくなく、本来定期的な

伊勢湾台風、長島町の被害①



洪水によつてもたらされる土砂から必要量の土砂を補充しつつ、米作を行つてきました。



伊勢湾台風、長島町の被害②

長島では明治の改修工事後、大きな破堤、洪水がなくなつたため、土砂の供給が減り堀田の面積はより増大し、改修工事後の最南端の干拓輪中(松蔭輪中)では、網の目のように張り巡らされた水路の中に水田があるようなものでした。このようなかで伊勢湾台風は襲来しました。

昭和三十四年九月二六日、当日の午前中は台風が近づいているような空ではなかつたといわれています。夕刻から降り始めた雨は、潮の岬付近に台風が上陸した午後六時頃、長島付近では風雨共に非常に強いものになっていました。当時の長島では家の戸に板を打ち付けたりして家を補強し、台風に備えていました。輪中と呼ばれる地区でさえ、明治改修後約六〇年間もの永きに渡り、破堤・入



伊勢湾台風、長島町の被害③

水の経験のないところとなつていたために、水防に対しての精神的な備えは、昔ほどではなくなっていました。堤防の決壊は午後八時過ぎと推定されます。時速六〇kmの早い台風は上陸後も勢力の衰えはほとんどなく伊勢湾の西側を通る最悪のコースを進んだため、上げ潮

に乗って増大した高潮が伊勢湾の最奥を襲いました。長島町では南部の松蔭地区あたりが最初に決壊し、通常の河川の洪水とは逆方向から、即ち海から輪中内に海水が侵入し、上流に向かって波は押し寄せ、住民は逃げるまもなく押し流されてしまいました。このときの最高潮位はおよそ四mに達したといわれています。長島町での被害については、別表の通りです。農地農業用施設災害総額は九一七万円でした。

長島町では伊勢湾台風後、緊急災害復旧工事にひきつづき、本復旧工事が行われ、従来の堤防から二m近くも高くなり、南部の地域にはコンクリート三面工法が用いられた。波返しもつけられました。これらの復旧工事は、

本町の被害状況

	北部地区	中部地区	伊勢島地区	合計
人口	1,290	5,139	2,279	8,708
世帯数	248	1,038	388	1,674
死者	1	101	281	383
全壊	4	130	96	230
半壊	65	408	109	582
倒壊	0	3	10	13
流失	0	78	168	246
床上浸水	40	158	3	201
床下浸水	77	82	0	153
無被害	60	180	3	243
全滅戸数	0	9	13	22

台風が去った翌年昭和三五年一月から始められ、昭和三七年七月に完了しました。

耕地整理事業の進展

長島での耕地整理事業は、昭和三〇年四月長島地区区画整理事業として始められました。この事業と相前後して、長島は明治以降、楠村・長島村・伊曾島村の三地域に分かれ独自の行政を行っていましたが、昭和二九年に長島村が町政を施行したのをはじめ、翌年には楠村が長島町に合併、昭和三二年には伊曾島村が合併し、現在の長島町（新長島輪中）ができました。新長島輪中は複合輪



耕地整理前の水路にかかる橋（橋の下は舟を通行させるため台形上になっている）

中となつたものの、楠村と長島村では地盤高が若干違っていました。江戸時代には長島輪中内の中心付近に木曽川堤から揖斐川堤までを横断する井桁（輪中内堤防）を作り、洪水の危険度を半減さ

せるなどの工事を行っていたため、従来の小輪中間では地盤高が若干違つてきたのです。また長島村と伊曾島村の間には両村を分ける鰻江川が流れており、伊曾島村の旧支配が新開の輪中で長島藩ではなく天領であつた時期が長かつたため、それぞれの旧村の都合により一斉に区画整理が始まつたわけではありませんでした。こうした理由に加え、それぞれの集落は開発時期が違つたり、輪中の特有の住居形態である列状集落によつて農地が囲まれているため、同一村内のおいても集落によっては区画整理が始まつた年月は違いました。

さて昭和三〇年から始まつた区画整理事業は、堀田と呼ばれる泥田から乾田へまた機械化の進む農業生産の流れの中、順調に進んでいきましたが、昭和三四年九月二六日、伊勢湾台風により壊滅的な被害を受けました。そのため区画整理事業と共に災害復旧事業も平行して行われましたが、台風後の昭和三五年一月からは、長島町の最南端に位置する松蔭地区の区画整理事業も始められました。この結果昭和三七年には長島地区八〇七ヘクタール、一二億四三三一万二千元の総工費で完成しました。

普通水利組合から土地改良区へ

長島は海拔〇m地帯に位置し、輪中という防水共同体を形成し、治水及び利水を行ってきました。このため他の輪中については江戸期より水利組合を作



伊勢湾台風、長島町の被害④

り、共同体を文書化して運営していました。長島輪中については水利組合の成立は比較的新しく、南部の伊曾島村が明治三二年葭ヶ須輪中に水利組合を設立したのをはじめ、明治三三年には長島村水利組合の設立認可が下りました。そして明治の改修工事が終わり、新開輪中として成立する松蔭地区にも大正七年には水利組合が設立されました。

戦後、農地改革が実施されると、長島では村外地主は全ての農地の所有を失い、村内地主も所有は七反までと限定されたため、耕作農民はほとんどが自作農民となりました。そこで昭和二五年にそれまでの楠村は水利組合から替わり、土地改良区が設立されることになり、昭和二七年には長島村も土地改良区が設立されることになりました。ここでは主に耕地整理事業の推進が話し合われまし

たが、昭和三〇年には楠村と長島町が合併したことにより土地改良区も合併しました。この間には水防に係っていた水利組合も昭和三〇年に長島町水防団を結成し、水防にあたることになりました。

用排水改良事業の進展

農地の灌漑排水は旧来、輪中堤に設けた樋門（ひ）で行っていましたが、明治の中ごろに各輪中毎に水利組合を設立して、排水機が建設されるようになりました。排水機は明治三三年に長島村十日外面に建設した人造樋が初めてで、ここに水車式排水機が設けられました。また明治三七年には、長島村大島に蒸気排水ポンプが設けられた後、動力も電力に移ってモーターの使用に替わっていきました。しかし灌漑についてはその後も通管樋管を建設して利用していましたが、昭和二九年木曽・長良両川の改良浚渫工事が始まると、その残土を輪中内にサンドポンプで噴き入れ、農地の嵩上げや池沼および不用河川の埋め立てが行われました。これを機会に区画整理事業が進むと共に、土地改良区ごとの幹線排水路が設けられ、昭和三九年には伊勢湾台風の復旧事業と共に排水事業は略完了しました。

また昭和三三年からは奥宮木曽川下流農業水利改良事業が始まりましたが、昭和三〇年代後半から同四〇年代に掛けて地盤沈下が進行し、最大では

伊曽島地区白鷄で累積沈下が2m以上にも達し、海水の遡上が激しくなりました。昭和五二年からは木曽川総合用水事業が始められ、昭和五四年からは団体営灌漑排水事業、非補助土地改良事業が始められ、木曽川の水を導水管（パイプライン）によって各農地に灌漑ができるようになりました。これによりようやく不安定な用水管理から開放され、施設園芸などの新しい農業経営も行われるようになりました。

長島町の特産品

長島では豊かな台地と豊富な水により、古来より稲作が盛んで、平坦な堤内にはそのほぼ全域が田地でした。わずかに畑作としては夏作として瓜類、西瓜、胡瓜、茄子、唐辛子、薩摩芋が作られ、冬作としては大根、蕪、麦、菜種、じゃが芋、えんどうなどが作られています。この中でも菜種は、多量の水と水捌けのよい土地である長島に適しており、堀田で耕作した稲作の裏作として、堀田を高く積み上げて作った『くね田』と呼ばれる高い畝の畑で大量に生産されました。

「江戸の灯りは伊勢のなたねでもつ」といわれていたほど盛んでした。しかし時代と共に菜種油の需要が減少し、また化成肥料の普及により菜種糟の生産も少なくなりました。そのため昭和三〇年代になると菜種の生産は減少していきますが、昔から一株あたりの菜種の

増産をはかるために、摘心といって成長する先端を摘んでわき芽を出していましたが、これらを食用としていた農家もありました。その頃それを青果市場に出荷することもありました。そこで手で摘み取る場所から自然発生的に「ツミナ」と呼ばれ、個人別ばら売りが行われました。昭和四〇年代後半には出荷基準や栽培基準が決められ、名前も「なばな」とし、地元中京圏をはじめ、関東、北海道にも出荷されるようになり、三重県のブランド野菜となりました。

また「トマト」も盛んに生産していますが、これは昭和六三年に日本で初めて「ハウス桃太郎」の栽培に成功したため、減反政策の中で温室やビニルハウスでのトマト栽培が北部地区を中心に広まってきました。



なばな

過去の水害の影響などで、もともと土壌に若干の塩分を含むため、製品のトマトは甘く、また完熟してから出荷するために真っ赤なものとなっています。

この他、木曽三川河口の伊勢湾では

「ハウス桃太郎」トマト



海苔養殖も行われていますが、海水と淡水の混じりあう好漁場で、品質のよい海苔がたくさん生産されています。

VOICE GALLERY

ボイス・ギャラリーは本誌へのご意見や地域の情報などを紹介するコーナーです。今回は多数のご意見の中から、次の皆様の声を紹介いたします。

VOICE ①

岐阜県立大垣農業高校教員 中田博章さん

本校環境緑地学科では「環境緑地」という科目で「水と緑と土」をテーマに環境やそれを取り巻く問題について学習させております。

この中で「水」については西濃地域の水の歴史や現在の河川工法など「KISSO」の内容を大変参考にさせていただいております。

今後も「KISSO」発刊が永く続きますよう、お願い申し上げます。

VOICE ②

東京都文京区 桜蔭中学校 鈴木里佳さん

八月に木曽川文庫へうかがった時、いろいろなことを教えてくださり、ありがとうございました。おかげで九月一日に「輪中における治水の歴史」として学校に提出することができました。「KISSO」をはじめた皆さんの貴重な資料をいただき、当初私が考えていたよりも内容が深く充実したものに仕上がったと思います。もと早くお礼の手紙を書くつもりでしたが、休みの明けのテストなどがあり、遅くなってしまいました。本当にありがとうございました。

VOICE ③

富山県富山 富山小学校 四年生の先生と皆さん

一〇月二七日に木曽川文庫と船頭平開門を見学させていただき、ありがとうございました。子どもたちのお礼の気持ちをカードにしました。読んでいただけたら幸いです。

※富山小学校のお礼のカードは木曽川文庫の入口に展示してあります。



【お詫言】

Vol. 48のボイスギャラリーの中で渡辺千賀恵さんの名前が間違っておりました。お詫言申し上げます。

【編集部からのお詫言】

治水に関わる記念碑や水神様などの資料（場所・概要・写真等）をご提供ください。

民話の小箱

覚明さまとどうがん岩 木曽福島町

むかしのお話です。

岩郷村の鳥居集落は、木曽川のせせらぎの聞こえる美しいところでした。

村のなかを中山道が通っており、

その名のように街道のそばには大きな鳥居がたっていました。

鳥居の両側にはこれもまた大きな石灯籠が一对たっていて、

村の人々も、中山道を通る旅人も

ここから御嶽山を遙拝していました。

山は神々が住まうところ。

自然を育む神聖な場所でしたから、

御嶽信仰という宗教も生まれたのです。

しかし、鳥居の場所からは御嶽山は見えません。

ここから少し上がった山の中腹に

どうがん岩と呼ぶ大きな岩があり、

裾野まで美しく見えますので、

御嶽の姿を拝みたい人は

わざわざそこまで登っていったものだと思います。

どうがん岩の上は平らになっており、

まん中が少しくぼんでいました。

そしてそこには、きれいな水がたまっており、

不思議なことに枯れることはありませんでした。

覚明という立派なお坊さまが

御嶽山への登山道を開かれたところ、

この岩の上から、御嶽山を拝まれたようので、

川合原からこの岩へ来るときは



木曽川にできている大きな渚の

長とろを棒を使って自由自在に渡ったといひます。

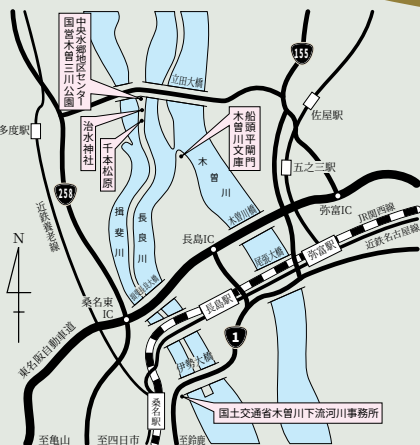
どうがん岩のくぼみの水で目を洗うと、

眼病が治るといふ信仰があり、

村人だけではなく遠く松本や中津川の方からも

ここへお参りにきたものだと思います。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平岡門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

木曽川の背割堤では、12月初めコハクチ
ヨウ3羽が確認されましたが、その後、数は
増えません。川面に浮かぶ冬鳥の数が年々少
なくなっていくのは淋しいことです。

今号の編集にあたって、木曽福島町、木曽森林
管理署の皆様、及び諸戸靖氏にご協力いただき
ました。ありがとうございました。

次回は、岐阜県美濃市を特集します。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

●表紙写真● 左：木曽川と崖家づくりの家並み 右上：福島関所資料館 右下：中原兼遠館跡

『KISSO』Vol.49 平成16年1月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976